

2025 年 4 月 19 日（土）実施

滝学園創立 100 周年記念講演会、土曜講座 23 周年記念講演会

講師：大石 静 先生（脚本家）

演題：「テレビドラマの作り手として」

2025 年 4 月 19 日（土）に、23 回目となる土曜講座記念講演会を開催しました。2026 年度に創立 100 周年を迎えるのに合わせて、100 周年記念講演会としての位置づけもされています。本講演会は毎年、同窓会のご支援のもと運営されており、同窓会の皆様には厚くお礼を申し上げます。今年度は 2024 年の大河ドラマ『光る君へ』でも有名な、脚本家の大石 静先生を講師としてお招きしました。以下、講演の中で印象に残ったお言葉を紹介しながら、講演の概略を掲載させていただきます。

「オリジナルが書けてこそ一人前の脚本家」

最近は視聴者の気を引くためもあり、漫画や小説などを原作にしたものが多いそうです。しかし、心に残る力強いドラマはオリジナルが多く、オリジナルの作品が書けてこそ一人前の脚本家であることを、強調されておられました。

「人間は思ったことの 2 割くらいしか表現していない、8 割くらいは隠している。2 割をセリフにして、8 割を感じさせるのが脚本の難しいところ」

脚本はほぼセリフのみで構成されています。心情を直接表現できる小説とは異なり、セリフだけで隠された心情を感じさせなければいけません。そこに、脚本の難しさがあるそうです。

「作品のテーマや哲学を示すのが脚本家の仕事」

脚本は別名台本ともいうように、そのドラマの土台になります。セリフだけで表現することは難しいですが、ドラマで訴えたいテーマを提示することが大切なことだそうです。

「多くのスタッフ・キャストの力の結集として出来上がるのがテレビドラマ」

ドラマは脚本をもとに、役者、演出、音楽、照明、編集などが加わって視聴者に届きます。同じ物書きでも、小説家は一人で完結する仕事ですが、脚本家はチームで仕事することに違いがあります。寒い日も暑い日も早朝から夜中まで、撮影に臨む役者やスタッフが「この台本ならどんな苦しい撮影も頑張ろう」と思い、士気を上げることも脚本家の役割だと考えておられるそうです。また、自分の書いた脚本がどのように料理されるかを待つスリリングな感じが好きで、大石先生は脚本家を続けていらっしゃるそうです。

「わかりやすく行儀の良い人間だけを描いては、人生は表現しきれない」

人間の心の中には、誰の心の中にも天使と悪魔の心があります。その両面を出さないと奥深いものにはなりません。人物を立体的に描くこと、人生の不条理さを表現することを、心がけておられるそうです。

「様々なものの見方を提示しなければ、メディアとしての存在意義はない」

今のテレビは、わかりやすさ、角のなさ一色になってしまっていて、とても危険です。本来テレビは様々な意見を視聴者に届け、視聴者が独自の判断をする材料を届けることが使命であると、強く訴えておられました。

「既成の価値観を疑うまなざしと、矛盾に満ちた人間を立体的に表現していきたい」

人の心の軸をゆさぶり、ドキッとさせ、視聴者の胸をたたきたい。人は必ずしも感情の通りに行動するとは限らず、矛盾に満ちた人間を立体的に描きたい。大石先生のドラマ作りへのこだわり、熱い情熱が伝わってきました。

「ローカルを知らずして真のグローバルはない」

昨今、グローバルな意識を持つことの大切さがよく語られますが、一方で世界はローカル的なものを求めています。まずはローカルを大事にして、ローカルをよく知ってから、グローバルな人間になってほしいと、締めくくりのメッセージをいただきました。

そのほか、テレビドラマの作られ方、『光る君へ』に込められた思いやエピソードなど、さまざまなお話を伺うことができました。ご多忙の中、ご講演いただいた大石先生に、あらためて感謝申し上げます。

【生徒のアンケートより】

実際の作品づくりの裏話を聞いたのもとても興味深く、脚本家という仕事の奥深さを実感しました。テレビドラマの裏側を知ることができ、とても楽しい時間を過ごせました。この講演を通して、自分の中のいろいろな感情や視点をもっと大切に、物事を多角的に捉えることの大切さに気づきました。

キャラクターを立体的に描くというところが心に残った。自分はよく絵を描いてキャラクターを作る時に、とりあえず自分の好きなものを詰め込んでみるけど、厚みがなくて薄っぺらく感じてしまい、そのキャラクターをしっかりと愛しきれないと感じることが多々あった。いろいろな面からそのキャラクターのことを考え、作っていくこと。それから人間らしい矛盾した部分を何か入れることの大切さが、この講演会からわかった。創作活動がより楽しくなったので、とても良かった。

脚本家という仕事について、魅力や難しさを語ってくださったが、その口調から大石さんが自分の仕事に誇りを持っていることを感じ取ることができ、自分も将来、誇りに思える仕事ができたらいいな、と思いました。

「人の人格は語尾にこそ宿る」という言葉が印象に残りました。確かに小説やドラマ、映画を見ている時や実際友人と話している時、その人の育ちや性格を判断するのは語尾だなと改めて納得しました。また、よく私は「ドラマや映画は小説と違って登場人物の心情がわかりにくいな」と感じるの

すが、それはドラマや映画は小説のようにその場の状況説明があるわけではなく、ほとんどセリフのみで進んでいくからだと知ることができました。「表の二割に隠れる裏の八割」の裏の八割を知るために、ドラマや映画を頑張ってじっくりみようと思いました。

グローバルに目を向ける前に、ローカルを学びなさいという言葉が心に残りました。グローバル化と言われ続けている中で、自分の地域だけのローカルを理解するからこそ、グローバルも理解できるのだなと感じました。

ドラマが作られる流れやキャスティングの話などが聞けて、とても面白かったです。大石さんの哲学「既成の事実を疑う」は少し驚いたけれど、心に刻んで過ごそうと思います。周りの考えや常識に流されるのではなくて、自分の軸をもって物事を見られる人になりたいです。そして、メディアが持つ影響力は大きいと改めて感じました。「光る君へ」を見るまで、藤原道長は自信満々で偉そうなイメージだったけれど、今は全く思いません。私は、メディアの影響力は良い方向に働くことも、悪い方向に働くこともあると思います。その中で情報を取捨選択するのは難しいけれど、多くの情報を見て多くの人の考えを聞いて、自分の軸を作っていきたいです。